

インタビュー

VOL.14

大橋 まひろ 先生

京都第一赤十字病院乳腺外科 副部長

臨床→研究→非常勤→そしてまた臨床、
4人の子育てとキャリアのバランスは変化する



2025年1月10日に、「キャリア・復職支援のロールモデル座談会」を開催し、重見博子先生と大橋まひろ先生を囲んでセンタースタッフが話を伺いました。座談会の中での大橋先生のお話をインタビュー形式でまとめました。

1 自己紹介をお願いします

京都第一赤十字病院乳腺外科の大橋まひろです。息子が4人います。人に自慢できるようなキャリアではないのですが、私がおもてなしながら行ったり戻ったりした道のりが、後輩の先生方や女性医師が多い診療科の医局運営の何かの参考になったらと思ってお話しさせていただきます。

2 これまでのキャリアの軌跡について教えてください

卒後、初期研修から前期専攻医までは普通のキャリアで乳腺外科に入局し、一次出張で京都鞍馬口病院の外科専攻医をしている時に、子どもを2人産みました。その後、卒後8年目に入学した大学院(予防医学教室)で3人目の子供が生まれました。基礎研究がとても楽しく、研究を継続するためにフューチャー・ステップ研究員に採用していただき、更に4年間研究メインの生活をしました。その頃は今とは違って乳腺外科では基礎研究をする環境があまりなく、このまま基礎講座で研究を続けるのか、いずれ臨床に戻るのかを迷いながら、臨床の第一線を退いて計8年経ってしまいました。この間非常勤勤務は続けていたのですが、ベッドをもってターミナルまで看るような仕事から離れている期間が長すぎて臨床へのモチベーションが低下し、今後のキャリアにすごく悩んでいました。

この時期が最初のキャリア選択の悩みの時期です。基礎講座でのポジションの誘いもいただいたのですが、研究は楽しいのに外科への未練もあって基礎に行きますとも言い切れず、悶々としていたところに、夫の静岡県への異動が決まりました。

3 それが大きな転機になったのですね

静岡県は乳腺外科の関連病院もなく、親戚も誰一人いない未知の土地です。夫に単身赴任してもらうのか、家族で引っ越すのかの決断を迫られました。臨床か研究かという悩みを一旦保留にできる第三の選択肢に飛びついてしまったところもありますし、子供が小学生のうちしか家族で引っ越せないと思ったこともあって、夫についていくことを決断しました。就活をしなくちゃということはいゆる転職エージェントに登録してみたら、高待遇のオファーが多くて驚きました。学位と専門医、マンモグラフィの読影資格があったことが評価されたそうです。当たり前ですが、人柄や仕事への取り組みといったことは第三者からの評価が難しいですし、市場での医者への評価には専門医の有無や卒後年数などが重要であることを知りました。

ところが病院が決まりかけたところで第4子の妊娠が発覚し、しばらくは無職を覚悟で静岡に引っ越しました。私は京都生まれの京都市育ちだったので、当初は文化の違いに戸惑いましたし、折しもコロナ禍で、知らない土地で人との交流もなく家にこもっているのはしんどかったですね。でも、子供が学校から帰ってくるときに家にいる生活が初めてで、ただいま～、おかえり～、のやりとりが新鮮で、帰ってくるなり今日の出来事を話してくれるのが、これは実は幸せな時間かもしれないと思いました。子供の習い事もたくさん始めました。手間がかかるから敬遠していた少年スポーツも始めて、試合の応援に行くのを楽しんだり、長男の中学校受験、三男の小学校受験のサポートが存分にできることも喜びでした。ただ、長男は5年生で転校したのですが、なかなか馴染めず学校に通えなくなってしまいました。どうしても京都に帰りたいというので、6年生になる時に京都に戻り、祖母宅から元いた小学校に通学して幼なじみたちと一緒に卒業することを選択しました。長男はなかなか苦しい一年を過ごしたのですが、その時期に、私が家にいられたというのは良かった気がします。もしかしたら、家にお母さんがいるから学校休めるっていう、どっちが先かわからないですが、子供なりの何らかの SOS のタイミングだったのかもしれないし、とにかく子供が苦しい時期に自分に余裕があって寄り添えたのは良かったなと思います。

仕事は、四男を出産して半年後にたまたまのご縁でマンモグラフィ読影医が足りなくて困っているところで非常勤を再開しました。自分の得意分野のピンポイントの仕事でしたが、ものすごく感謝されました。需要の高いところで働いて喜んでもらえるのはとても嬉しく、収入を通じて自分が社会で必要とされていることを確認できました。

スタートはちょっとしんどかったのですが、振り返ってみたら充実して楽しい2年間でした。私にとっても子供たちにとっても必要な時間だったのかなと思っています。

静岡で2年経ったところで、第二のキャリア選択の悩みがきます。夫はもう1年静岡にいたのですが、もう1年待つと次男が6年生で転校することになりちょっとかわいそうだったので、私と次男は長男の待つ京都に戻ることにしました。京都でワンオペ4人は不可能だと思ったので、小学1年の三男と1歳の

四男をどうしようと悩みに悩んで夫と話し合いました。結果、保育園は給食も出るし遅い時間まで預かってくれる、ちいさな子は手がかかるけれども、小学生のように宿題をみるとか提出物をチェックするか習い事とかの大変さはないので、夫一人で面倒をみることができるのは1歳児だという結論に達し、夫と四男を静岡に残して、私が上3人と京都で暮らすことになりました。夫もなかなか大変な一年を過ごしたみたいですが、末っ子は無事に2歳になって翌年夫とともに京都に帰ってきました。

4 京都での仕事をどうするかということになったのですね

京都に戻るようになったときに、非常勤の楽な生活を続けるのか、臨床をするのか、研究をするのかをすごく悩んで、友人や先輩後輩にもいろいろ相談したのですが、決め手は乳腺外科の直居教授からのアプローチでした。私が静岡にいる間に教授に就任されたので面識がなかったのですが、面談に呼んでいただいて「臨床か研究かで悩んでいます」と伝えたら、「まずは臨床です。自分宛の紹介状がくるくらい臨床をきちんとして、余裕があったら研究をしたらどうですか」と言われて、迷いが晴れました。希望の病院についても、「いくつか候補の病院があります。医局からも子供が4人いて大変だという状況は伝えておくので安心してください」というやり取りを何度もしていただきました。私のことを必要としてもらっている、私が戻ってもいいのだということがすごく感じられました。

病院選択については、10年ぐらい臨床のブランクがあったので、上司がいて外科医としてのリハビリがちゃんとできるところ、という希望を出したところ、京都第一赤十字病院を提示していただきました。そんないい病院に行かせてもらっていいのかなという思いもあったのですが、せっかくなので頑張ってお受けしようと思い、お世話になることにしました。復職の際に、丁寧なヒアリングをしてもらったということが非常にありがたかったです。

5 京都第一赤十字病院での乳腺外科のお仕事と今後の予定はいかがですか

今まで勤務したどこよりも忙しい病院なので、仕事と家庭のバランスが大きく変わって、慣れるまで時間がかかりました。慣れればやりがいも大きい病院です。直居教授と医局スタッフの先生方が病院によく話を通してくださっていたおかげで、かなり配慮してもらっています。

今後、プライベートでは3年後に次男の高校受験と三男の中学受験と四男の小学校受験がトリプルでやってきます。これまでも子供の受験の時期がなにかとしんどかったので、そこをどう乗り越えていくか、受験経験者からぜひアドバイスをいただきたいです。

6 大橋先生のロールモデルはどなたですか

まずは実母です。学生結婚した専業主婦ですが、娘達には「絶対に手に職をつけなさい、できれば国家資格をとりなさい、社会的責任と収入が自分の自尊心を保つのです」と言って育てました。母の影響で、私は専業主婦になる選択肢をもちませんでした。

実母と対照的なロールモデルとして、バリキャリ研究者の従叔母がいます。働く母親への理解がない時代にバリバリ切り開いてきた方です。その従叔母から「女性は出産もあるし、どうしても少し休まな

いいいけない時がある。しんどい時にはどんなにゆっくり歩いてもいいけれど、止まってはいけない。止まったら、もう動けなくなるから」と言われたのが心に残っています。

私達の世代よりもっと苦労して両立をしてこられた重見先生が「若い子持ちの世代のサポートをしたいと思っているよ」と言ってくださったときには、自分が上の世代になったときには、ぜひ下の世代をサポートしたいなと思いました。また、上司がとても厳しくてつらい思いをしていたときに、他科の上の世代の先生が折に触れて「大丈夫？」と気にかけてくださり、ちゃんと見てるからね、というメッセージを送ってくださったのも、心が折れずに仕事を続ける支えになったと思います。他にも、外来の看護師さんから「妊娠初期がしんどいよねえ」「両立のカギは段取り」という共感や助言を頂いたり、これまで出会った先輩方すべてが私のロールモデルだともいえますね。

7 後輩に伝えたいメッセージを教えてください

1つ目は「優先順位1位は自分の人生」です。自分の人生は自分でしか幸せにしてあげられません。こういう風になりたいと思っても、異動や子供や介護など、どうにもならないことがたくさんあります。そんな時には0か100で、続けるかやめるか、ではなく、ちょっとペースダウンやキャリアダウンしても、いつか戻ってきたらよいと思ってください。

2つ目は「取れるものは取れるときに取っておく」です。症例数、論文、学位、専門医、すべて保険になります。いつキャリアダウンするかわかりませんが、その時に自分を支えてくれます。どんなに頑張っても日々の仕事をしていても、それを知っている先生がいないところに異動する場合もあるので。

3つ目は「たくさんロールモデルをもつ」です。一つの正解にこだわらず、こういう時はこっち選んでもよし、こちらでもよし、という風にしてください。医局でも、バリバリ働くのだけを正解とせず、ちょっとゆるっと働くのも許容してもらえたら、将来その先生が戻ってきた時には下のサポートをしてくれるのではないかと思います。

8 最後にひとことお願いします

私自身のキャリアは右往左往してきたのですが、おそらく子育て中の医師の悩みには似通ったところがあると思うので、自分の経験が誰かの役に立ったら嬉しいです。迷ったときに思い浮かべられる選択肢は多い方がいいですね。キャリアを極める人も、ゆるゆるやっている人も全部正解だと思うので、いろいろなロールモデルのひとつになればいいと思います。どちらかというと男性医師は仕事に邁進するモデルが多いのは気の毒かもしれません。男性医師も子育て中は非常勤になったり、キャリアダウンしたっていいと思います。男性医師のロールモデルも紹介してほしいですね。

貴重なお話をありがとうございました。大橋先生のキャリア選択の悩みポイントでの考え方と選択は非常に興味深く、キャリアの岐路に立つものにとって、多くのヒントや勇気を与えてくれるものでした。別の機会にでも、パートナーと1歳のお子様との静岡での1年間の生活についても伺いたいですね。